ノーサイド

北原　巖男

新たな一歩

10月26日、防衛省の隣にある「グランドヒル市ヶ谷」（防衛省共済組合運営）。この日、全国各地から様々な分野の多くの皆さんが駆け付けました。目的は、本紙「防衛ホーム創刊50周年記念祝賀会」。

祝賀会は、吉田佳子社長の、防衛省・自衛隊の皆さん・読者の皆さん・企業の皆さん等に対する感謝の気持ちいっぱいの、明るくエネルギッシュな開会の辞で始まりました。

前社長の所谷尚武会長のご挨拶は、創刊当時の防衛庁・自衛隊を巡る状況や支援してくださった方々についての思いが、静かに伝わって来るものでした。

僕は、元防衛政務次官であり公明党の国会対策委員長を務められ、その後も親身なご指導を賜って参りました東　順治先生（10月17日に急逝されました）から頂いたショートメールを思い出しながら、所谷会長のご挨拶に耳を澄ませていました。

東　順治先生は、「自衛隊員家族　紙面で支え」との見出しで掲載された2022年10月25日付け「高知新聞」の所谷会長へのインタビュー記事をご覧になられていました。

「確かに自衛隊に対する国民の眼差しは、私が防衛政務次官だった頃と比べても大きく変わりましたよね。その陰には、この所谷さんのような方の長い歳月の献身があったのでしょうね」

木原　稔防衛大臣を始めご来賓・参加者の皆さんは、それぞれに本紙と関わられ、半世紀の歩みに敬意と感謝を表されると共に、新たな一歩へ熱い声援を送っていました。

本紙社員の皆さんも、当日配布された式次第の中で、「自衛隊の皆様に寄り添い、創刊当初の目標を見失わずに努力を続けて行くことを、改めてお誓い申し上げ、これからも防衛省・自衛隊の側で応援し続けて行きたいと思っています。防衛ホーム新聞社　社員一同」と、力強い挨拶をされています。

いつでも、どこでも、自衛隊員の皆さんやご家族の皆さんの傍にいて、皆さんを励まし、応援し続けている唯一無二の存在。そんな本紙の次の50年に向けた新たな一歩に、皆さんと一緒に力いっぱいのエールを送りたいと思います！

本祝賀会に、僕は高知県から駆け付けました。実は、新たな一歩が高知県で始まっているのです。

それは、日本初の東ティモールからの技能実習生のこと。東ティモールは、独立回復から既に21年を経て、未だ自国産業が育っていません。そのため、若者の雇用問題は国の最重要懸案の一つとなっています。

その東ティモールから、本年9月18日、日本で初めて技能実習生7名（男性3名・女性4名）を受け入れてくださったのが高知県なのです。7名は、一か月の研修を経て、各農家等にて技術実習を始めたばかりです。

僕は、元防衛大臣であり日本東ティモール友好議員連盟の会長である中谷　元先生をはじめ、高知県・高知県中小企業団体中央会・高知アグリファーム協同組合（監理団体）・受け入れ先の農家等の皆さん達が、東ティモールの技能実習生を温かく迎えてくださっておられることに、心から感謝申し上げております。

とかく問題が多く、見直しが行われている技能実習生制度です。今回、僕は、東ティモールにて技能実習生の候補者の皆さんに日本語を教えている丹羽千尋さんと一緒に技能実習の現場にお伺いしました。技能実習生の様子を直接拝見し、また関係の皆さんのお話を種々伺う中で、技能実習はもちろん、日常生活や余暇を含めて、高知の皆さんが、種々心遣いしてくださっておられる姿に接しました。とても嬉しく、また有難く思いました。

激励した技能実習生の皆さんは、日本語もビックリするほどに上達していました。しかし実習を始めたばかりの皆さんです。全く違った環境の中で、これからいろいろ辛いことやご苦労にも直面して行くことと思います。

監理団体や受け入れ先の皆さんが、共通して懸念されておられたことは、技能実習生に心配事や希望を聞いても、「ありません」とか「大丈夫です」との返事が一様に返って来るだけということでした。今は、緊張感でいっぱいの技能実習生だと思います。少しづつ心を開いて行って頂きたいと思います。そして元気に、高知に来てよかった、日本に来てよかった、そう思える滞在になって頂きたいと思いました。

彼らの新たな一歩を、心から応援したいと思います。

彼らの一歩は、次に続く皆さんの一歩でもあります。

Yes,you can do it!

……

北原　巖男（きたはらいわお）　元防衛施設庁長官。元東ティモール大使。現日本東ティモール協会会長。（公社）隊友会理事